

## 条件文とモダリティに関する研究

－日本語の条件表現とモダリティの相互関係の分析－

### 学位論文内容の要旨

本論文は、日本語において条件文がいかに関係され、解釈されるか、また、モダリティとの関連でどのように位置づけられるべきかを、主として文法論の観点から研究したものである。基盤的な枠組みを構成するにあたって、時枝文法以降の主要な文法論を参考にし、文構造や表現機能を階層的に捉える立場に立っている。また、日本語記述文法・日本語教育・談話文法の成果も踏まえ、必要に応じて、ポライトネス理論をはじめとする語用論・社会言語学の成果、文法化に関する認知言語学的な成果、心理言語学的な語用論の知見などを取り込み、広く一般言語学的な知見も踏まえている。

本論文は、6章で構成されている。第1章では、先行研究を概観しながら条件文とモダリティにかかわる解釈モデルを出発点として設定し、第2章では、条件文の種類をいくつかに分け、特に通常の条件文とは区別する必要がある「ねじれた条件文」についても分析を加えている。第3章では条件文を描写レベルで分析し、第4章では、認識のモダリティについて検討した後、条件文を認識レベルでいかに分析するかを議論している。第5章は、行為系のモダリティを仮想的な条件文などとの関連で考察している。第3章から第5章までの分析は、第1章で提案したモデルのレベルに対応するものである。第6章では、前章までの議論を簡単に整理し、それまでに議論しきれなかった問題のいくつかについて考察を加えている。

以下、各章について個別に述べる。

第1章では、仁田義雄・益岡隆志といった記述文法系のモダリティ論を確認しながら、渡辺実・三上章・寺村秀夫の文法論やチャールズ・フィルモアの格文法などを参照して、叙述と陳述、コトとムード、命題とモダリティといった二項対置を軸に、山田文法などと言う複語尾類を拡張命題成分として核命題と拡張命題成分が拡張命題を形成する基本的枠組みを提案する。拡張命題成分はおおむね非モダリティの助動詞に相当し、描写レベルまでを担い、モダリティ助動詞は認識レベルのものと行為レベルのものにおおむね分化するものとしている。さらに文末モダリティは $P \rightarrow Q$ という複文全体を支配域にすると見て、描写・認識・行為という三層からなる陳述構造を提案している。そして、この複層陳述構造が、条件節の連結形式ごとのスコープの違いを説明できるとする。

第2章では、前件が後件の成立に関与しないタイプの条件文を「ねじれた条件節を持つ」

として分析し、この種の条件文がネガティブ・ポライトネスの効果を持つことを指摘している。また、反事実条件文が、アスペクトにかかわる既定性を利用することで現実世界の事象ではないという解釈を誘導すると分析している。

第3章は、最初に提案した階層モデルのうち、描写レベルの条件文を分析している。そして、バ・ト・タラの諸形式が描写レベルで使用可能であるのに対し、ナラ形式は描写レベルではなく、認識レベルで用いられると主張する。また、時制との関わりでは、バ形式が過去事象に用いられると認識レベルに転じることを指摘し、条件節のアスペクト形式と前時性・後時性の関係などを整理している。

第4章は、階層モデルのうち認識レベルの条件文について分析を行っている。まず、先行研究を参考に認識のモダリティ形式について整理した上で、命題成立のあり方と直接性という観点から認識モダリティ形式を可能性判断・確信判断・証拠性判断・推量の4つのカテゴリーに分類している。さらに、その枠組みに従い、可能性判断・確信判断・推量のモダリティ形式は条件文に用いる上での制約がほとんどないのに対して、証拠性判断の場合はナラ形式が不適切になる制約がかかることを指摘する。また、モダリティ形式の前後にタが現れる（いわゆる多重テンス）についても、事象のテンスと判断のテンスという分担が見られることを確認している。

第5章では、行為レベルの条件文の分析を行い、ト形式がおおむね不適格になること、前件が後件動作主の意志動作である場合にバ形式が不自然になること、ナラ形式の直前でテンス分化も統一的な原理で説明可能なこと、などを指摘している。

第6章では、前章までの議論をまず条件文という観点からまとめ、ついで、モダリティの観点からまとめている。また、本論文での枠組みとしては独立して扱わなかったタラバ形式とナラバ形式の記述と分析を補足的に行い、加えて、条件節における格助詞ガをとりたて詞ハと対比して論じている。

最後に、残された課題についてまとめ、論を閉じている。

条件文の研究は、条件節と帰結節という2つの節による複文の分析であり、この種の複文は埋め込み文を従属節とする複文に比して、それぞれの節の統語的制約が小さく、独立的にアスペクトやモダリティのマーカーが現れるため、分析そのものが非常に煩瑣になる。本論文では、いたずらに最先端の語用論理論に飛びつかず、文法論のなかでも談話要素を広く取り込める南文法などを参考に、独自の階層文法を分析モデルとして構築した上で全体的に整合性のある分析を行っている。

# 学位論文審査の要旨

主 査 准教授 加 藤 重 広

副 査 教 授 清 水 誠

副 査 准教授 佐 藤 知 己

学 位 論 文 題 名

## 条件文とモダリティに関する研究

－日本語の条件表現とモダリティの相互関係の分析－

本学位申請論文は、平成 20 年 11 月 28 日に提出され、12 月 19 日に審査委員会が発足してから、五回の審査委員会を開催し、あいだに口頭試問を一度課して、厳格に審査を行った。その後、平成 21 年 2 月 20 日の文学研究科教授会に審査結果を報告し、3 月 3 日の最終審査（投票）を経て、学位授与が決したものである。

本論文の研究を広く言語研究の流れの中に位置づけてみると、その意義が理解しやすいものと思われる。例えば、言語学におけるモダリティの研究は、おおよそ半世紀に満たない歴史しかなく、日本語文法の領域では四半世紀程度しかさかのぼることができないが、近年、各個別言語についても、通言語学的観点や一般言語学的観点からも多くの研究が行われている。また、方言記述を含めて、日本語文法全般においても、モダリティの研究は極めて盛んである。一方、日本語の条件文の研究は、かつては散発的にしか取り上げられず、最近になってまとまった成果が報告されている程度である。しかしながら、モダリティとの関係で条件文を体系的に論じた研究は他にほとんど例がないというのが、現状である。これは、条件・帰結関係や、原因・帰結関係が、複数の節の意味的關係を特定する上で、文法論的分析だけでなく、語用論的分析も必要になる、非常に負担の大きい研究テーマとなることが大きな理由であると思われる。本論文は、統語論と語用論にまたがる難事業を推し進めることで、結実したものとして評価できる。

本論文は、主に日本語記述文法における先行研究を参考に、関連する他の成果も取り込みながら、独自の枠組みを与えて分析している点で評価できるほか、バ・タラ・ナラ・トなどの条件節の連結形式ごとに分けて説明を与えており、それらを日本語教育などでも活用できる知見として提供している点もまた重要な成果だと言える。加えて、条件文からねじれた条件文を切り離し、命題を取り込む条件表現の複文構造を規定して一貫した処理を行っている点、条件節と帰結節の緊密性を描写・認識・行為の各レベルと連動させて整理分析している点、解釈処理に心理語用論的な知見を取り入れている点など、研究の枠組みや着眼点としても大いに示唆するところがある。また、これまでの記述文法的な研究では、

バ・タラ・ナラ・トの各形式の使用要件や制約、意味や機能の差異を、形式的あるいは構文的に説明することに力点を置いてきたが、本論文がそれを更に前進させる形で、陳述のレベルや語用論的要因と関連づけて機能的に説明することに成功している点については、研究成果として重要な意義を持つものと認められる。

本論文は、渡辺文法・南文法・北原文法・寺村文法+など文の叙述構造に階層性を想定する文法、日本語記述文法の多くの成果、日本語語用論に関わるいくつかの成果など、先行研究を国文法から最近のモダリティ研究、文法化の理論、ポライトネス理論まで広く理解して取り込み、独自の枠組みを条件文の分析のために組み上げた点がまず評価できる。また、条件文の適切性などについては微妙な判断が必要であり、細心の注意が求められる例文の作成・収集といった煩瑣な議論を地道に行い、分析・論証を行っている点は、言語研究のあり方としても模範的な妥当性を持つと言えるだろう。また、日本語を母語とする者にとっても難度の高い研究を、日本語を母語としない筆者が最後まで完成させた事実と、その日本語の運用力の高さをあえて評価に加えずとも、研究の水準と内容について十分な意義が認められる。

一方で、モダリティと支配域・焦点解釈の関連について掘り下げ方が不十分である点、文叙述の階層構造が陳述論に拡張できる普遍的モデルなのか限局的スキーマなのか明確でない点、機能と形態の区分を重視していながら細部では区分が不十分な点など、今後全体的に再検討していかなければならない問題点は見られるものの、日本語研究における条件文とモダリティの研究の現状を見る時、本論文での成果は重要な知見や提案を含んでおり、その評価を大きく損なうものではないと思われる。以上を踏まえ、審査委員会は委員全員の一致した見解として、博士（文学）を授与するのに相応しいものであると判断し、その報告を踏まえて文学研究科教授会における最終審査において学位授与が決したものである。